

Title	māe(母)の文献学
Author(s)	林田, 雅至
Citation	大阪外国語大学論集. 1 p.145-p.152
Issue Date	1990-01-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79460">https://hdl.handle.net/11094/79460</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## mãe (母) の文献学

林 田 雅 至

### A filologia sobre a palavra mãe

Masashi HAYASHIDA

A palavra mãe vem da latina madre, através da transformação diacrônica. A forma primitiva da mãe foi apresentada numa cantiga de escarnho, atribuída a João Fernandes d'Ardeleiro de época tardia, talvez 2.º quartel do século XIV, conforme sugerem certas formas já evoluídas, como *mai*, *traz* e *fodido*, em lugar de *madre*, *trage* e *fodudo*.

Trata-se, segundo se colhe daquele termo, *amiga*, do verbo *sofaldrar* e dos versos da «finda», de uma cantiga d'amigo chula, em que vem à baila um sangrador de Leiria, que abusava das mulheres a quem ia tirar o sangue, apalpando-as onde não devia.

A partir dessa época, a Guerra entre Portugal e Castela começou a ficar grave, na qual foi cada vez mais estabelecendo o poder da Rainha D. Leonor Teles (1350?-86), sobretudo depois da morte do Rei D. Fernando (1345-83), politicamente apoiado pelo *direito divino dos reis*, conceito ideológico que foi descrito no livro chamado de *Speculum Regum* (1341-44) de F. Álvaro Pais (c. 1275-1349).

### Prologus

0.1 私は昨年度「ことばのひろば」(大阪外国語大学 学生部広報「ひろば」第90号, 93号)を利用して, 1つの実験を試みたつもりである。それぞれ pai (父) と mãe (母) について文献学的な史料を掘りどころにして通時的な分析を行い, また文学史的な観点から啓蒙的に日本ではまだまだ知られていない《ポルトガル》という国を紹介したのである。語学科以外にも広く興味を持っていただけるようにと考えてのことである。そしてこの種の拙稿を蓄積させて3・4年生を対象にした文学講義・演習の教育現場に反映させて, 活用したいと思っている。いわゆる人文系・文学部の

授業とは少し種類を異にする《外国語大学》らしい、言語学・文献学をも包含するような通時的な文学理解を目指したいと切望しているのである。

今回の論文は mãe だけを取り扱うが、語学科内で既に配布して実践的に利用した、それぞれの語の解説をより専門的に上げた version を基にしている。

0.2 念のためテキスト比較の観点から「ことばのひろば」のテキストも資料としてここに転載することにする。

0.3 なお本稿は東京外国語大学の恩師である1988.3.8に逝去された吉沢先生の御霊に捧げられた『吉沢典男教授追悼記念論文集』（1989）に投稿した拙稿「pai（パパ）の文献学」と対をなすものである。

## I Mãe について

1.1 資料I「ことばのひろば」（大阪外国語大学 学生部広報「ひろば」第93号），1988.7.1, p. 26.

① 単語（原語）mãe ② 意味 ③ 発音（カタカナ）マンイ ④ Mãe の diachronic な形態論的変遷は以前紹介した pai(父親)のそれに準ずる。簡略に示すと、L. matre (-m)>madre [現代 Portuguese では《修道女》の意]>made>mai>mãe となる。Mãe の鼻音化は L. mihi>mi>P. mim (前置詞の目的格：1 人称単数代名詞)，L. multu (-m)>P. muito (非常に、沢山) 同様、語頭 m-のためである。Mai, mãe が共存して文献に現われるのは15・16世紀になってからである。さて mai が文献上初めて登場するのは14世紀第2 四半世紀 (1325-50) に詠まれた、何とも下品なしかし中世的に寛容な官能的気分の横溢した戯歌の中にである。病の床にある女の元に色事師の瀉血(しゃけつ) [Europe で液体病理学が完成された2 世紀以降、19世紀に至るまでに万病に適用され続けた魔術的治療法(静脈切開)。別名、吸血鬼療法] 職人が訪れ、治療の名目でよからぬ部位に瀉血しようとするが、女は羞恥心を赤裸々に吐露すると同時に行為自体に対してはさほど拒絶する風でもなく、／そんな所に瀉血されるなんて／と歓喜にも似た叫び声を上げる。それが畳句となって3 度繰り返される。最後に女は／そのような戯れを御望みならば、あなたの母上(mai)を相手にされるがよろしかろう／と瀉血職人をたしなめている。この14世紀第2 四半世紀頃 Portugal では Castilla との間に長期化する戦争の口火が切って落とされた。英仏戦争・教会分裂に巻き込まれ、混迷の度合いは一層深まることになる。両国間の王位継承権争奪には熾烈極まりないものがあり、政略結婚・暗殺など権謀術数の限りが尽くされた。その中でも際立った存在は《淀君の母》を彷彿とさせる女傑・王妃 D. Leonor Teles (1350?-86) である。年少の一人娘を Castilla 王に嫁がせ、病弱な国王の死後、自らはやがて誕生する孫が元服を迎えるまで摂政を敷くことにするのであるが、それに先立ち前国王の庶子であり、時期王位の最有力候補であった João 王子に奥方(実は Leonor の妹)は他の男と姦通していると虚言を弄し、奥方を殺害した暁には自分の一人娘を輿入れさせ、

王位を保証すると甘言で騙す。妻の犯さぬ罪への復讐心と政治的野心に燃える王子は妻の寝込みを襲い、首尾よく事を成就するものの、豈図らんや殺人罪で国外追放の処分に甘んずることになる。群雄割拠する過酷な封建社会の非情なる母親像である。

1.2 それでは授業中に使用した version を基にして論を展開してみよう。

1.3 Mãe の diachronic な形態論的変遷は簡略に示すと、L. *matre* (-m) > *madre* [現代 Portuguese では《修道女》の意。プロヴァンス起源の *freira* も同義である。cf. *freire*<sup>1)</sup>] > *made* > *mai* > *mãe* となる<sup>2)</sup>。Mãe の鼻音化は L. *mihi* > *mi* > P. *mim* (前置詞の目的格：1人称単数名詞)、L. *multu* (-m) > P. *multo* (非常に、沢山) 同様、語頭 m- ためである<sup>3)</sup>。Mai, mãe が共存して文献に現われるのは15・16世紀になってからである<sup>4)</sup>。しかしルネサンス期のイタリアの影響を強く受けた詩人 Sá de Miranda (1485?-1558) などは詩の中で *pai* と脚韻を踏ませるために *mai* の語形を好んで用いている<sup>5)</sup>。

1.4 さて *mai* が文献上初めて登場するのは14世紀第2四半世紀 (1325-50) に詠まれた、何とも下品なしかし中性的に寛容な官能的気分の横溢した戯歌 [Cantigas de escárnio ou maldizer 《嘲り・罵りの歌》に分類される。] の中にある<sup>6)</sup>。病の床にある女の元に色事師の瀉血 (しゃけつ) [Europe で液体病理学 (humoral pathology) がアリストテレスの学徒・巨匠ペルガモン人のガレノス (129頃-199) によって完成された2世紀以降、19世紀に至るまで万病に適用され続けた、不調の体液を排除するという意味での魔術的治療法 (静脈切開)。別名、吸血鬼療法 (Vampirism)<sup>7)</sup>] 職人が訪れ、治療の名目でよからぬ部位に瀉血しようとするが、女は羞恥心を赤裸々に吐露すると同時に行為自体に対してはさほど拒絶する風でもなく、／そんな所に瀉血されるなんて (al fodido irá sangrar/sangrador en tal lugar!)／と歓喜にも似た叫び声を上げる。それが疊句となって3度繰り返される。最後に女は／そのようなたわむれを御望みならば、あなたの母上 (*mai*) を相手にされるがよろしかろう (Quen tal jogo quer jogar, con sa mai vaa joguetar.)／と瀉血職人をたしなめている。

1.5 この14世紀第2四半世紀 D. Dinis の息子である D. Afonso IV (1291-1357; 在位1325-57) の治世下 Portugal では Castilla との間に長期化する戦争の口火がきって落とされた。英仏百年戦争 (1339-1453)・教会分裂 (1378-1417) に巻き込まれ、混迷の度合いは一層深まることになる。両国間の王位継承権争奪には熾烈極まりないものがあり、政略結婚・暗殺など権謀術数の限りが尽くされた<sup>8)</sup>。

1.6 その中でも際立った存在は《淀君的母亲》を彷彿とさせる女傑・王妃 T. Leonor Teles (1350?-86) である。既婚者であったにも拘らず時の第9代国王 D. Fernando (1345-83; 在位1367-83) と恋仲になり、Pombeiro 領主の子であり、国王の優れた家臣でもあった夫 João Lourenço da Cunha に対して、教皇から授与されていた離婚無効証書を公然と無視する形で強硬に離婚承認を命と引き換えに迫り内諾を得てしまうのである<sup>9)</sup>。

一方国王はこの秘密裡の結婚[正式な挙式は1372.5.15-18の間に Leça do Bailio で行われている]

によって第1回対 Castilla 戦争の際、教皇 Gregório XI の仲介で結ばれた Alcoutim の和平条約 (1371. 3. 13) の条件である Castilla 国王 Enrique II の娘 D. Leonor との婚約を破棄することになる<sup>10)</sup>。

D. Fernando が Castilla の王位継承権を主張するランカスター公爵 John of Gaunt (1340-99) と政治的共同体制にあることを知った Enrique II は一度は戦争回避の努力はするものの、指揮権を発動 Zamora から Viseu, Coimbra, Santarém を経て Lisboa に侵入する (1373. 2. 23)<sup>11)</sup>。首都には既に国王は蛻 (もぬけ) の殻で愛妻の出産を案じてか Coimbra に難を逃れている。2月7日から13日の間に後年政略結婚の道具とされる愛児 D. Beatriz が誕生している<sup>12)</sup>。

この間にも Castilla 軍の攻勢で北部国境付近の Faria 城に籠城するポルトガル軍の城主 Nuno Gonçalves は国王に城を委託された名誉のために城を死守し、敵の槍の前にあえなく殉死して果てるのである<sup>13)</sup>。

1.7 ところで D. Leonor Teles は年少の一人娘を Castilla 王 Juan I に嫁がせ (1382. 4. 2)、病弱な国王の死後 (1383. 10. 22)、自らはやがて誕生する孫が14歳元服を迎えるまでに摂政を敷くことにするのであるが<sup>14)</sup>、それに先立ち第8代前国王 D. Pedro I の庶子であり、次期王位の最有力候補であった D. João 王子 (1352?-97?) に奥方 [実は Leonor の妹にあたる D. Maria Teles. D. Fernando との婚姻問題では正に東奔西走した思慮分別のある人物であった<sup>15)</sup>] は他の男と姦通していると虚言を弄し、奥方を殺害した暁には自分の一人娘 D. Beatriz を輿入れさせ、王位を約束すると甘言で騙す<sup>16)</sup>。妻の犯さぬ罪への復讐心と政治的野心に燃える王子は妻の寝込みを襲い (1379. 6月か7月上旬)、首尾よく事を成就するものの<sup>17)</sup>、豈図らんや殺人罪で国外追放の処分に甘んずることになる (1380. 10)<sup>18)</sup>。群雄割拠する過酷な封建社会の非情なる母親像である。

1.8 出世に利用できる者を操り、また出世の邪魔者を犠牲にする度に悪者のイメージを濃くしていった D. Leonor Teles も最終的には中世の終焉を示す《1383-85年革命》で Avis 王朝の開祖者 (1385. 4) となる Avis 騎士団長 D. João (1357-1433) に大敗を喫し<sup>19)</sup>、1494年スペインとポルトガルの海外領土分割を規定した条約を結んだ地として知られるスペイン北西部の町 Tordesillas にある修道院で圀の鎖に繋がれ、程なくしてそこで生涯を閉じるのである (1386. 4. 27)<sup>20)</sup>。

1.9 ここまで文献学よりも歴史学に重点が置かれた説明になった嫌いはあろう。以下では前半部 (1.3; 1.4) に力点を移して、mãe に関する文献を分析してみる。

## II Mãe の登場する文献

### 2.1 さっそく文献を紹介することにしよう。

Un sangrador de Leirea  
me sangrou estoutro dia,  
e vedes que me fazia:  
andand' a buscar a vea,

レイリア県の一人の瀉血職人が  
この前、私のもとに瀉血に来たのです、  
その男が私に何をしたかをまあ御覧なさい：  
切開のための静脈を手探りで探し出し、

foi-me no cuu apalpar:  
al fodido irá sangrar  
sangrador en tal logar!

私のお尻に手を入れて触ったのよ:  
私の木通に瀉血なさろうとされるとは  
瀉血職人様, そんな所に瀉血とは!

Este sangrador, amiga,  
traz ua nova sangria,  
onde m'eu non percebia:  
filhou-me pela barriga,  
começou a sofaldrar:  
al fodido irá sangrar  
sangrador en tal logar!

この瀉血職人は, お友達よ, よく聞いて  
新しい瀉血のやり形をしたのよ,  
私の納得のいかない所に:  
私のお腹をぐっと捕まえて,  
下着を捲り上げ始めたのよ:  
私の木通に瀉血なさろうとされるとは  
瀉血職人様, そんな所に瀉血とは!

E tal sangrador achedes,  
amiga, se vos sangrades;  
quando vos non percatades,  
se lho consentir queredes,  
querrá-vos ele provar:  
al fodido irá sangrar  
sangrador en tal logar!

そういう手合いの瀉血職人にきっと会えるわ,  
お友達よ, あなたが瀉血をなさろうとして:  
警戒をなさらない時には,  
あなたが職人にうんと申されるならば,  
男はあなたの火所を試すはずよ:  
私の木通に瀉血なさろうとされるとは  
瀉血職人様, そんな所に瀉血とは!

Quen tal jogo quer jogar,  
con sa mai vaa joguetar.

そんな悪戯をお望みならば,  
そなたの母上をお相手になさればよろしかろう。

*Joan Fernández d'Aredeleiro.*

(N° 936 de *Cancioneiro da Vaticana* [14世紀に編纂。ヴァティカン図書館に現存するものはイタリアでつくられた15世紀末か16世紀初頭の写本]<sup>21)</sup>)

2.2 こういう種類の歌を分析する学問的価値が一体どこにあるのかと叱責の言葉を浴びそうであるが, 実は幾つかの意味で分析に足る *Cantiga* なのである。

まず最初に説明しておきたい点は, 下品で卑俗な内容であるからこそ, つまり民衆的な素朴な感情の発露した歌であるからこそ, 当時はまだ意味論的にも形態論的にも正当と考えられていた語形 *madre* と対になる民衆的な新しい語形 *mai* が用いられているのである。また宗教に根ざす当時の言語的な感覚 (通念) に照らせば, この詩の中に聖母マリアのイメージと二重写しになる *madre* を使用することは不可能であったろう。

2.3 次に畳句に現われる語形 *fodido* に注目してみよう。

この語形は本来動詞 *foder* の過去分詞であり, ここでは名詞として使われている。現代ポルトガルでは過去分詞の語尾は2種類あって, *-ado* (<動詞 *-ar*) と *-ido* (<動詞 *-er, -ir*) である。ところが歴史的に見た場合, *-ado* はラテン語 *-atum* から古ポルトガル語 *-ado* を経由して現代語に帰着するので問題ないのであるが, *-ido* の方はラテン語 *-utum* > 古ポルトガル語 *-udo* とラテン語 *-itum* > 古ポルトガル語 *-ido* の2系列があって近・現代語で一本化されたのである。古ポルトガル語では

foder の過去分詞は, creudo (<creer>crer), têudo (<têer>ter), perdido (<perder>perder) と同じように fodudo である。この詩では既に近・現代語の語形が使われていることから, また2.2の mai の語形の採用からも, この詩の執筆の時期が14世紀第2四半世紀頃であることが分かってくるのである<sup>22)</sup>。

2.4 また語形 achedes [接統法2人称複数現在形] (>現代語 acheis<achar), sangrades [直説法2人称複数現在形] (>現代語 sangrais<sangrar), percatades [直説法2人称複数現在形] (>\*percatais), queredes [直説法2人称複数現在形] (>現代語 quereis<querer) のそれぞれに見られる母音間の -d- については, それが脱落するのは15世紀前半になってからのことである<sup>23)</sup>。

2.5 以上眺めたように《幾つかの意味で分析に足る (2.2)》文献であったことがこれで証明できたであろう。

### III Epilogus

3.1 さて最後に文学史的な意味で1.5-1.8の叙述の史料について触れておきたい。国王年代記作者 Fernão Lopes の *Crónica del-rei D. Fernando* を主として参照した<sup>24)</sup>。国王サイド, つまり体制側にありながら, 結婚に関して宗教的な道徳から外れることを文学的に極めて赤裸々に叙述したり (1.6), Castilla 軍のリスボン侵攻に対して, 市民は敵が攻めてくるとは露とも思わず, 国王が敵の進軍に我慢などする筈はないだろうと固く信じていたので, 当初全くの無防備であったが...<sup>25)</sup> というような語り口であり, 先を続けると, 国王が Coimbra に逃れ, 敵の前に敢然とその勇姿を現わして, 進軍を阻止する行動に出なかったことを知るや, 自らの命は自らの手で守らなければならないという市民共同体意識に基く協力体制から《キリスト教徒もユダヤ教徒も》仲良く相互に助け合って<sup>26)</sup>、国土回復運動 (1147年 Lisboa 征服) 直後建立されたリスボン大聖堂を中心とする旧市壁内の狭い空間に当時約6万5千人と言われる市民が立錫の余地もないほどにひしめきあって避難するのである<sup>27)</sup> という具合に, 民衆の息吹きを感じられるような, また彼らの肉声が伝わってくるような民衆史観で貫かれている。

3.2 英仏ならば中央集権国家・絶対主義体制の精神的基盤である王権神授説が歴史上登場してくるのは16世紀から17世紀にかけてであり, この政治理論は Jean Bodin (1530-96)『国家論』(6巻)及び Bossuet (1627-1704)『聖書政治論』に説かれている, と高校の『世界史』のテキストにはたいいそのように書かれている。

ポルトガルの場合は歴史的事情がやや異なるとみてよい。国家の独立・建国が他のヨーロッパ諸国に比較して極めて早いために, 換言すれば, 《早熟》であるために, 政治的な意味で王権の中央集権化成熟の時期が相対的に早くなっているのである。国王 D. Pedro I, D. Fernando の大法官位にあった F. Álvaro Pais (1275頃-1349) の書『王の鏡 (*Speculum Regum*)』(1341-44)に既に王権神授説を示す概念が現われている<sup>28)</sup>。

D. Fernando の唯我独尊で独善がちな態度はこの説に由来するものとみてよいだろう。歴史家 Fernão Lopes は年代記を通して、王権神授説が自明の理である以上、表立っては決して反旗を翻すことのできない、しかし許しがたい国王の挙動に対して、戒め・諫言の意味も意味も込めて彼なりに《反抗の鋒先》を向けたのではないだろうか。

3.3 リスボンの市民の鉄の絆によって、Castilla 軍は退去せざるを得ないことになるが、Enrique II は腹癪に商業地区 Rua Nova にあるユダヤ人街に放火している。当時の奢侈・贅沢のため湯水のように出費を行なう王室財政を支えていたのがユダヤ経済であったことを考えると<sup>29)</sup>、この放火事件は Castilla 軍の嫌がらせと見てよいだろう。

3.4 ポルトガル在住のユダヤ人を取り巻く問題は歴史学の興味をそそるだけではない。文学・文化を読み解く上でも重要なファクターである。これについてはまた別の機会に譲ることとしたい<sup>30)</sup>。

(1989.8.15. 孟蘭盆に記す)

#### [註]

- 1) José Joaquim Nunes, *Compêndio de Gramática Histórica Portuguesa* (8.<sup>a</sup> ed.), Lisboa, 1975, p. 94.
- 2) Edwin B. Williams, *From Latin to Portuguese*, Philadelphia, 1962, p. 77-78.
- 3) *ibid*, p. 62.
- 4) José Joaquim Nunes, *op. cit*, p. 120.
- 5) Sá de Miranda, *Obras Completas*, Lisboa, 1937, vol. II, p. 8.
- 6) M. Rodrigues Lapa, *Cantigas d'Edcarinho e de Mal Dizer* (2.<sup>a</sup> ed.), 1970, p. 310-11.
- 7) Mário da Costa Roque, *As Pestes Medievais e o «Regimento proueytoso contra ha pestenença» Lisboa, Valentim Fernandes* (1495-1496), Paris, 1979, p. 333-39, 342-45; 拙稿「ポルトガルのベスト養生訓」(大阪外国語大学学報72-2号, 1986), p. 31; 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』, 岩波書店, 1977, p. 84-85, 99, 112-13, 206, 393-95, 512, 530, 534-37, 676-77.
- 8) A. H. de Oliveira Marques, *História de Portugal*, vol. I, p. 174-85.
- 9) António José Saraiva 編, *As Crónicas de Fernão Lopes*, Portugália Editora, s.d, p. 47-77
- 10) Joel Serrão 監修, *Dicionário de História de Portugal*, Lisboa, 1971, vol. II, p. 382-83.
- 11) *ibid*, vol. I, p. 550-51; António José Saraiva 編, *op. cit*, p. 87-88
- 12) *ibid*, vol. I, p. 318.
- 13) António José Saraiva 編, *op. cit*, p. 871; ロマン主義の歴史家 Alexandre Herculano はこの事実に靈感を得て Fernão Lopes の *Crónica de D. Fernando* に基いて *O Castelo de Faria* (1373) とタイトルされた歴史小説を書いている。A. Herculano, *Lendas Narrativas I* (Coleção «Livros de Bolso Europa-América 221», Mem Martins, p. 137-44.
- 14) Joel Serrão 監修, *op cit*, vol. I, p. 319; *ibid*, vol. II, p. 483.
- 15) António José Saraiva 編, *op. cit*, p. 76.
- 16) Joel Serrão 監修, *op. cit*, vol. II, p. 483; António José Saraiva 編, *op. cit*, p. 110-115
- 17) *ibid*, vol. II, p. 378-79; António José Saraiva 編, *op. cit*, p. 115-19.
- 18) *ibid*, p. 379; António José Saraiva 編, *op. cit*, p. 121-25.
- 19) *ibid*, p. 483.
- 20) *ibid*.
- 21) 池上岑夫『ポルトガル語とガリシア語』, 大学書林, 1984, p. 71-72.
- 22) M. Rodrigues Lapa, *op. cit*, p. 310-11.



- 23) Vide 拙稿「pai (ペパ) の文献学」(『吉沢典男教授追悼記念論文集』, 1989) の註(9)
- 24) António José Saraiva 編, *op. cit.*
- 25) *ibid*, p. 87–88.
- 26) *ibid*, p. 88–90.
- 27) *ibid*, p. 90; José-Augusto França, *Lisboa: Urbanismo e Arquitectura* (Col: Biblioteca Breve vol. 53), Lisboa, 1980, p. 12–18.
- 28) Joel Serrão 監修, *op. cit.*, vol. I, p. 8–14.
- 29) J. Lúcio de Azevedo, *História dos Cristãos Novos Portugueses* (2.<sup>a</sup> ed.), Lisboa, 1975, p. 9, 14, 45, 363, 395.
- 30) 拙稿「1531年1月26日発生した地震とユダヤ人迫害の集団ヒステリー」(大阪外国語大学口承文芸研究会世界口承文芸研究第9号, 1987), p. 889–903; 同「異端審問制度と宮廷劇作家 Gil Vicente」(大阪外国語大学学報第74号, 1987), p. 87–96. を参照されたい。

#### 参 考 文 献

- Azevedo, J. Lúcio de, *História dos Cristãos Novos Portugueses* (2.<sup>a</sup> ed.), Lisboa, 1975.
- Costa Roque, Mário da, *As Pestes Medievais e o «Regimento proueytoso contra ha pestenença» Lisboa, Valentim Fernandes* (1495–1496), Paris, 1979.
- França, José-Augusto, *Lisboa: Urbanismo e Arquitectura* (Col: Biblioteca Breve vol. 53), Lisboa, 1980.
- Lapa, M. Rodrigues, *Cantigas d'Escarnho e de Mal Dizer* (2.<sup>a</sup> ed.), Vigo, 1970.
- Miranda, Sá de, *Obras Completas*, Lisboa, 1937, vol. II.
- Nunes, José Joaquim, *Compêndio de Gramática Histórica Portuguesa* (8.<sup>a</sup> ed.), Lisboa, 1975.
- Oliveira Marques, A. H. de, *História de Portugal*, Lisboa, 1972–74.
- Saraiva, António José 編, *As Crónicas de Fernão Lopes*, Portugália Editora, s.d.
- Serrão, Joel 監修, *Dicionário de História de Portugal*, Lisboa, 1971.
- Williams, Edwin B., *From Latin to Portuguese*, Philadelphia, 1962.
- 池上岑夫『ポルトガル語とガリシア語』, 大学書林, 1984.
- 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』, 岩波書店, 1977.